グループ文化発生への個人とグループ心性との葛藤による影響について

～Bionの集団理論に基づく実験的研究～

野　村　達　也

Ⅰ．問題

本研究は、グループにおける文化の誕生に関する研究であり、Bionの集団理論に基づいている。その理論の中でも「グループ文化」という概念に焦点を当て、グループにおける文化の発生についての臨床的な仮説を実証的に検証する事を目的としている。

そこでまず、各分野における文化の概念について整理していくことにする。文化人類学における文化の捉え方にはいくつかの種類があり、第１のものは包括的な捉え方である。文化は、特定の社会の人々によって習得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式の体系という意味に使われてきたことが多い。第２は文化を自然環境に対する適応の体系としてみる捉え方である。第３は、文化を適応体系として見る見解とは対照的に、文化を観念体系として捉える立場でしる。第4は、文化を象徴体系として捉える立場である。

社会学において文化とは、「自然」－「人間」－「社会」の象徴化形態のことである。また、文化は１つの体系－意味の体系である。例をあげると、欲求というような人間の法則的作用に対し、環境はそれ自体の法則で抵抗するが、この両者の間の緊張から人の工夫、考察した意味体系が成立するのである。

精神分析学において、Freud（1930）は、文化とは人間の生活と動物的な生活とを区別する一切の文物ならびに制度の総体で、自然から人間を守ることと人間相互の関係を規制することという2つの目的に奉仕すると考え、同時に人々が文化について不満や居心地の悪さなどの否定的感情を抱いていることに注目した。そして、Freudの文化による欲圧とその個人起源説を受け継ぎ、文化や社会に対する反抗と解放の可能性を積極的に考えるReich（1933）やMarcuse（1956）らは、性やエロスの力に社会体制の変革の推進力を期待し、その考えは1960年代に社会運動と連動したことがある。また、Winnicott（1971）によると、文化とは現実検討や現実受容を強いられる日常生活で提供されている内と外との間の休息地であるという。

そして、Bion（1961）は文化をグループの中で取り扱った。Bionによれば「グループ文化」とは、「ある与えれれた時点にけおける集団の獲得した構造、それが追求する仕事、ないしそれが選択した組織といったものが含まれる」のである。つまり、グループ内において見られるルール、リーダーシップ、グループ構造などのことである。

このように文化に関する概念には様々なものがあるが、本研究で取り扱う文化の発生とグループに関する研究はほとんどなされていない。しかし本研究の主となるBion（1961）の集団理論の中で、彼は次のようなことを述べている。「グループ文化とは、個人の欲望とグループ心性の葛藤の関数である。」また、グループ文化はその時支配的な基底的想定を反映している。そしてグループは、グループ文化を用いて、グループ心性の表現方法を変えたりあるいは弱めたりすると同時に個人の抵抗を減少させようとする。これらの理論は、Bionの臨床仮説によるものであるため実証的に検証する必要がある。

しかしながらこのグループ文化という概念は、Bionの集団理論という枠組みの中に位置づけられているので、理解するためにはBionの集団理論の基本的な概念の理解が必要となってくる。したがって、次にこれらの概念を

説明していくことにする。

Bionによると、グループが1つの課せられた仕事をやり通そうとする時に、2つの方向が生じるという。1つは共同でその仕事に取り組む方向（作動グループ）であり、もう1つは、同じ感情を共有することにより仕事を妨げる方向（基底的想定グループ）である。

作動グループとして機能しているグループでは、グループのメンバーが基本的な作業によって結ばれ、それに沿って行動する。そして、その作業を遂行するためには、メンバーそれぞれの能力に応じた協力が不可欠となる。また、その作業に向けられたグループの活動は、現実との関連を持ち、作業遂行のために合理的かつ科学的な方法を用いる。そのため、活動の現実的側面としての「時間」と「発達」は常に重視されている。

一方、基底的想定グループは、グループグループにおいて生じる、恐れや不安といった苦痛を回避するために、情緒的衝動の特性を持った精神活動によって作業実行を妨げる機能を持つ。そして、基底的想定は、幻想的であるが、そのメンバーにとっては、現実的で合理的であるという認識がある。

さらにBion（1961）は彼自身のグループ経験に基づいて、3つの異なった基底的想定を述べた。1つ目は依存基底的想定である。このグループでは、グループ自身は未成熟で助けを必要とする無力な存在であり、故に自身だけでは何もできない「かの様に」振る舞い、そして、グループの欲求を満たしてくれるであろうリーダーに絶対的に依存し、そのリーダーだけが全知全能であるというような幻想を抱いている。2つ目は闘争／逃避基底的想定である。このグループは、攻撃すべきあるいは避けるべき敵を内部か外部につくる。そしてリーダーは、その敵と闘うか、もしくはその敵から逃げるようグループを動員し、指示を与える能力を持つことのできる人物である。3つ目はつがい基底敵想定である。このグループは、未だ生まれていない、何か（救世主的）の誕生に対する希望と期待に特徴付けられる。そしてその救世主待望はつがいに託され、グループはそのつがいに期待をかける。

そして、グループをこれらの基底的想定グループに一致させる機能としてグループ心性がある。グループ心性とは、人々が1つのグループとして集まるときに起こる集合的心的活動であり、グループの一致した意志の表現である。そして、その意志には個人が無意識的に貢献する。

上述したようなBionの理論に基づいて、次のような仮説を立てた。仮説は、1)「グループに葛藤が生じたとき、グループ文化欲求は高まるであろう」、2)「依存基底的想定グループが支配的なときは、依存的な文化を最も要求するであろう。」、3)「闘争／逃避基底的想定グループが支配的なときは、闘争／逃避的な文化を最も要求するであろう。」、4)「つがい基底的想定が支配的なときは、つがい的な文化を最も欲求するであろう。」というものである。

これらの仮説を検討するために以下の実験を行った。

Ⅱ．実験方法

被験者は、ランダムに選出した本大学生169名であり、1グループ6名の計32グループで構成し、そのうち21グループはグループ内に葛藤を引き起こすサクラ1名、被験者5名の実験群とした。そして、残りの11グループが被験者6名の統制群である。

本実験のタスクは、今、自分達の町に原子力発電所の建設計画があり、それについてメンバー全員で話し合い、グループとして賛成か反対かはっきりとした結論を1つ出すことであった。

タスクは2つに分かれており、最初の20分間が、話し合いの時間、そして後半の10分間が最終決定の時間と設定されており、質問紙の記入は話し合い終了時と、タスク終了時の2回行われた。2回とも同じ質問紙である。質問紙には2種類の尺度を試用している。1つ目はグループ文化欲求尺度であり、2つ目は基底的想定グループQ-sortである。

Ⅲ．結果と考察

まず最初に第１仮説の検証である。そのために2 種類ある質問紙のうち、グループ文化欲求度を測る質問紙の分析を行った。まずこの質問紙の信頼性を調べるためにCronbach alphaを求めた。その結果、この質問紙の妥当性が確認された。また、因子分析を行って得られた因子を、実験群において話し合い終了時とタスク終了時で比較するために、対応のある標本の t ー検定を行った。その結果、全ての因子において、有意な差があり、また、グループ文化欲求度は作業終了時の方が高かった。これら２つの因子においては、グループ文化欲求度は作業終了時の方が低かった。また、他の因子グループにおいては有意な差がなかった。次に、グループ文化欲求の側面をタスク終了時の実験群と統制群とで比較するために t ー検定を行った。実験群と統制群の比較であるが、５つの因子全てにおいて実験群の方が高い数値を示した。これらの結果から第１仮説は検証されたと考えられる。

次に、第２、３、４仮説の検証である。そのためにまず、基底的想定を測る質問紙の信頼性を調べるためにCronbach alphaを求めた。その結果、この質問紙の妥当性が確認された。そして、因子分析によって抽出された因子をもとに、グループ文化の内容をその時支配的な基底的想定グループ（闘争／逃避、つがい、依存）毎に比較するために分散分析を行った。その結果「依存の文化」の項目においては有意な差が得られ、依存基底的想定グループが最も高い数値であった。「闘争／逃避の文化」においても有意な差が得られ、闘争／逃避基底的想定グループが最も高い数値であった。「つがいの文化」においても有意な差が得られ、つがい基底的想定グループが最も高い数値であった。これらの結果から、第２仮説、第３仮説、第４仮説についても検証されたといえる。

また、これらのことからの展開として、グループ文化の発生はその個人の欲求とグループ心性との間に葛藤が生じたときに起こるのであり、その時支配的な基底的想定グループがグループ文化の内容に反映されていることが分かる。